

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	中津川 祥子【論文博士】 【比較社会文化学専攻 平成17年度生】 (平成26年3月31日 単位修得退学)	要 旨
論文題目	雑誌『オペラ評論』および『オペラ』にみるオペラの受容過程について	<p>この論文は、大正期の日本人によるオペラ公演を対象として刊行された雑誌『オペラ評論』および『オペラ』を研究対象として取り上げ、その記事の詳細な分析によって、現在では「浅草オペラ」と総称的に呼ばれる大正期のオペラ上演について、その実態を明らかにし、そのことによって、日本においてオペラという西洋音楽のジャンルが受容される過程を明示するものである。</p> <p>浅草オペラについての研究は増井敬二や塩津洋子などによる雑誌や新聞の上演データの包括的研究や上演に関わる人物の記述、あるいは個々の俳優に着眼した著述などがあったが、対象となる歌劇団が限定されていること、また上演を見る側の情報がないなどの問題があった。また、大正12年の関東大震災で多くの資料が失われていることもあり、浅草オペラの実態を把握することは、困難であった。</p> <p>この論文で取り上げられた二つの雑誌は、その詳細な内容に踏み込んだ研究がなされていなかったが、申請者は池田文庫に所蔵されている現存する全ての号（大正8年から13年）の記事をデータ化することによって、次の3点、すなわち、編集者、読者、俳優の観点から分析した。その結果、編集者は京阪神の3都市と名古屋に支局が置かれ、各地での歌劇団の活動が報告されていること、読者は日本各地と統治下にあった地域に分散し、通信欄では俳優をめぐるネットワークが形成されるなど、活発な動きがあったこと、俳優は根岸歌劇団だけではなく、東京少女歌劇団、民衆歌舞劇団、楽劇座、浪華少女歌劇団などに所属して、日本全国で公演に出演し、俳優と歌劇団との関係は流動的であったことが明らかになった。</p> <p>以上のように、誌面を分析することにより、浅草オペラと称される大正期のオペラ公演は、多様な公演形態があり、変動する俳優を擁しつつ様々な都市で公演を打つ多くの歌劇団の存在と、誌面を通じて、あるいは実際の観客として俳優を応援しながらオペラ公演を楽しみにする読者の姿が明らかとなった。</p> <p>今後の展望として、同時期に発刊されていながら研究がなされていない雑誌の分析、および大衆芸能の場としての浅草において、西洋音楽であるオペラが日本人によって上演される意義など、研究の進捗が期待される。</p>
審査委員	(主査) 教授 永原 恵三	
	助教 井上 登喜子	
	助教 福本 まあや	
	准教授 小坂 圭太	
	准教授 西条 昇	